［シンポジウムⅡ］

ポーランド文学の多様性
――レム、シュルツ、フォーゲル、工藤幸雄

加藤　有子

１.

シンポジウム「ポーランド文学の多様性」は、ポーランド文学がポーランドという国家、領土、言語の枠を越えて広がっている、という、もはや人文学研究においては凡庸とすら響くテーマを掲げた。

文学研究、特に日本の海外文学研究では、ここ数十年来、越境性や複数言語使用が研究テーマとして注目され、国や言語別の枠組みを越えた研究、あるいはそれを越える作家や文学現象が注目されている。言うまでもなく、近代の国民国家は、一つの言語を持ち、その共通言語を話す国民から成る国家を想定していた。それに基づく「国民文学」という枠組みが、植民地主義後の世界、亡命や移民、複数言語使用の作家等々、現実の事象を捉えるには不十分であることが明らかになり、越境、亡命から世界文学へ、キーワードは変わりながらも、国別、言語別の文学研究を越えた横断的・比較研究的視野が定着している。

亡命文学、越境文学、世界文学が文学研究の主流な切り口となる一方、現実に目を転じると、日本でもポーランドでも狭い情緒的ナショナリズムが跋扈し、その勢いは21 世紀に入って日ごと強まるばかりだ。自国賛美の言説が権力者の側から吐き出され、文化行政にも濃い影を落とし始めた。文学や芸術もその文化政策のなかで消費、利用されかねない、あるいはされつつある（2019 年、文部科学省下の文化庁は、「表現の不自由展、その後」展が脅迫によって中止に追い込まれたあいちトリエンナーレへの補助金全撤回を、手続き上の不備を理由に事後的に決めた。日本の侵略や植民地主義をテーマにした作品が公的空間と公金拠出にふさわしくないと判断される例は、歴史修正主義的バックラッシュが政府や与党内で強固に進行するなか、枚挙にいとまがない）。多様性や異種混淆性を一つの特徴として捉える学術的視野や言説とは裏腹に、現実世界において、文学と芸術をナショナリズムの枠組みに回収する動きが確実に進行していることを見落とすことはできない。

逆に言えば、ここ何十年と文学研究において繰り返され、クリシェともなった多様性や異種混淆性、複数性に対する評価や目配りが、いま一度、机上の理論を越えて、そして過去に対する注釈ではなく、現実に対する批判的注釈として機能し始めている。ここから、シンポジウムという開かれた場において、改めて「多様性」を想起すると

いうコンセプトが生まれた。

＊

「ポーランド文学」と一口に言っても、ポーランド語で書かれた文学だけではないし、ポーランドという国境に閉ざされた文学でもない。「多様性」は第一に、作家の文化的背景に関わる。今回取り上げる作家、レム、シュルツ、デボラ・フォーゲルは、ポーランド文学にくくられるものの、みなオーストリア時代のレンベルク、現在のウクライナ領リヴィウ（ポーランド語でルヴフ）周辺の生まれである。その作品の文化的背景は、現在のポーランド国境やポーランド語という枠のなかだけでは見えてこない。レムに至っては、その思考はすでに地球基準の次元を超えて広がる。近年、再評価著しく、ウクライナ語、ドイツ語に続いて2018年には日本語訳も刊行されたフォーゲルは、イディッシュ語を執筆言語にすることで、1930年代にポーランドの辺境であるリヴィウにいながら、アメリカのイディッシュ語モダニズム文学の最前線に参加していた。美術のモンタージュ概念を文学に応用し、色彩と形態による現実把握の方法を小説において再現し、ジャンル横断を試みた。シュルツは同じく1930年代リヴィウ近郊のドロホビチを拠点としながら、旧約聖書の神話世界を現在の時間軸に混淆させていく。ドイツ語の中編も書けば、画業も手掛けた。彼らの活動は、言語、国境、芸術ジャンルを越える。

近年の戦間期ポーランド文学研究では、ポーランド語以外の文献資料に当たることによる新資料の発見、それに伴う作家の知られざる軌跡や文学史的発見が目立つ。それによって、20世紀のポーランドにおける前衛芸術の動きを世界的ネットワークのなかで捉える視野が定着しつつある。さらに、フォーゲル研究を端緒としてポーランドのイディッシュ語文学研究が急速に進み、これまでの空白を埋めつつある。体制転換とEU東方拡大以降、かつてのポーランド領東部国境地帯の文化的混淆状態が国際的にも注目を集め、ポーランド時代のウクライナ語資料の発掘も進む。ラテン・アルファベットのポーランド語世界から不可視化されていた、ポーランドの作家の知られざる軌跡が現れるようになった。

そして、これらの作品を翻訳によって日本の文化に移植したのが工藤幸雄氏であり、その翻訳からインスピレーションを受けて創作しているのが画家の小川信治氏である。アメリカ出身のクエイ兄弟も、翻訳を通して東欧の作家の世界に触れ、それを人形アニメーション・フィルムで再現している。「多様性」は、第二に受容に関わる。受容と創造の連鎖によって、文化的多様性はさらに豊かに広がっていく。

シンポジウムは、20世紀ポーランド文学の専門家であり、スタニスワフ・レム、ヴィトルド・ゴンブローヴィチ、ブルーノ・シュルツ研究の第一人者であるクラクフのヤギェロン大学イエジ・ヤジェンプスキ教授の来日と、ポーランド文学の日本語訳者と

して多大な功績を残した工藤幸雄氏の没後 10 年を機に企画された。ゴンブローヴィチ、シュルツは日本でもその作品のほとんどが翻訳され、ポーランド文学のなかでもかなり広く、あるいは狭く熱く読まれている作家である。そのゴンブローヴィチやシュルツのほか、ポーランド・ロマン主義詩人アダム・ミツキェーヴィチの『パン・タデウシュ』をはじめ、古典から前衛、現代までポーランド文学のすぐれた目利きとして、良作を翻訳したのが工藤氏であった。その訳も単にこなれて簡潔で読みやすいという凡庸なものではない。たとえばシュルツの場合、そのバロック的かつ緻密なメタファーの文章を古語を使い、日常語とは異なる詩的な表現をあてて日本語に見事に再現した。それでも訳は読む勢いを妨げず、むしろページを繰る手を加速させる。工藤氏の業績を想起しつつ、そこにゆるやかに連なるテーマでプログラムを組み立てた。なお、工藤氏の没後十年記念イベントの発案は、氏とミツキェーヴィチ『パン・タデウシュ』の共訳をはじめ、多くのお仕事を一緒にされている久山宏一氏による。

２.

シンポジウムは報告と映像上映から構成された。最初に、2018 年末に日本語訳を刊行したデボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く』について筆者が報告した。フォーゲルは長くブルーノ・シュルツの作品誕生のもとになった文通相手として、ポーランド文学史では副次的に扱われる存在であった。リヴィウを拠点に主にイディッシュ語詩人、作家として活動し、1935 年と 36 年にイディッシュ語とポーランド語でそれぞれ刊行された『アカシアは花咲く』がもっとも知られる。2006 年、戦後長らく忘れられていた『アカシアは花咲く』がポーランド語で再刊された。その編者であり、イディッシュ語文学研究者のカロリナ・シマニャクによって、ポーランドでは「実験的」として当時は高い評価を得ることのなかったフォーゲルが、1930 年代後半は作品発表の場をアメリカのイディッシュ語モダニズム文芸誌に移していたことが明らかにされ、ポーランド文学の枠を越えたその活動が注目を浴びるようになった。ドイツ語で全集が刊行され、ウクライナ語でも翻訳が出ており、英語でも翻訳が準備されている。女性、イディッシュ語、ポーランドの辺境在住、という 20 世紀ヨーロッパ文化史のマイノリティとして忘却されていた作家が、東欧の辺境を拠点としながらアメリカでモダニズム文学の前線に参加していた存在として、東欧モダニズム地図を書き換える存在として、表舞台に姿を現したかたちだ。報告では、『アカシアは花咲く』を読み解くカギとして、同時代美術の視覚の変容、モダニズム建築との関係、モンタージュ概念、シュルツ作品との類似を概観的に提示した。

３.

続いて、画家であり、ブルーノ・シュルツとレムの愛読者であり、シュルツをモチー

フとした作品をクラクフ近代美術館（MOCAK）の依頼で準備中であるという小川信治氏が、時間と空間のねじれや交差をテーマとした自身のドローイングと映像作品を呈示し、そのうえで、シュルツの作品に現れる時空をめぐるフレーズを当時の物理学を照合しながら解釈した。

小川氏の『Without You』シリーズは、有名な西洋絵画から主要な人物を消去し、その空白を想像で補完するもので、フェルメールの「牛乳を注ぐ女」やゴヤの「ラス・メニーナス」などを「素材」としている。『Perfect World』シリーズは、『Without You』シリーズの逆に向かう作品であり、画面にすでにあるものがさらに追加され描きこまれ（たとえば、クラクフの中央広場の旧市庁舎塔が 2 本描きこまれ）、現実の風景が非現実化される。『Behind You』シリーズは、すでにある絵画イメージを円筒形の空間に閉じ込め、その円筒を原イメージとは別の線から切り開いたときに出来上がるイメージを平面に描く。小川氏は、時空やありうる複数の世界像に対する関心を自作を例に示したあと、その延長線上で、シュルツの短編を読み解いた。

シュルツの短編集『肉桂色の店』（1933）、『砂時計サナトリウム』（1937）に収録された短編に現れるフレーズには、アインシュタインの特殊相対性理論（1905）や同時代の量子力学との照応が見られるという。「時間と空間は同じものである。」（「肉桂色の店」／相対性理論）、「空間は枝分かれし、反転しながら様々な形でつながりあっている」（「肉桂色の店」／量子力学）、「世界は分岐したままで一つに収束しない」（「大鰐通り」／量子力学）、「過去は分岐させることができ、複数の異なる時間を同時に存在させることが可能」（「砂時計サナトリウム」／多世界解釈→ブロック宇宙論）、等の事例が提示された。時間、空間はシュルツの短編に頻出するテーマであり、それを同時代の物理学に照らした研究はこれまでなかったように思う。シュルツ研究としても、大変興味深いテーマが提示された。

なお、本シンポジウムのチラシの背景イメージは、小川氏が特別に作成したものである。シュルツの短編「大鰐通り」の冒頭に出てくる父の書類机の引き出しに入った折り畳みの大きなバロック式の町の地図をモチーフに、シュルツの肖像画が描きこまれている。

４.

その後、シュルツの短編「砂時計サナトリウム」を原作に、クエイ兄弟が現在制作中の人形アニメーション・フィルムの特別編集版（10 分）が上映された。クエイ兄弟はもちろん、シュルツ原作「大鰐通り」の人形アニメーション・フィルム（邦題「ストリート・オブ・クロコダイル」）で知られる。上映したのは、2019 年 2 月から 4 月までルブリンで開かれたクエイ兄弟展「痕跡のドミトリウム」のために特別編集されたものである。葉山、ニューヨーク、バルセロナなど、各地をアップデートしながら巡回している展覧会であり、これまでも部分的な上映があったが、音声が入ったバージョンは今回が初となる。短編「砂時計サナトリウム」のポーランド語原文の男声朗読が入った。

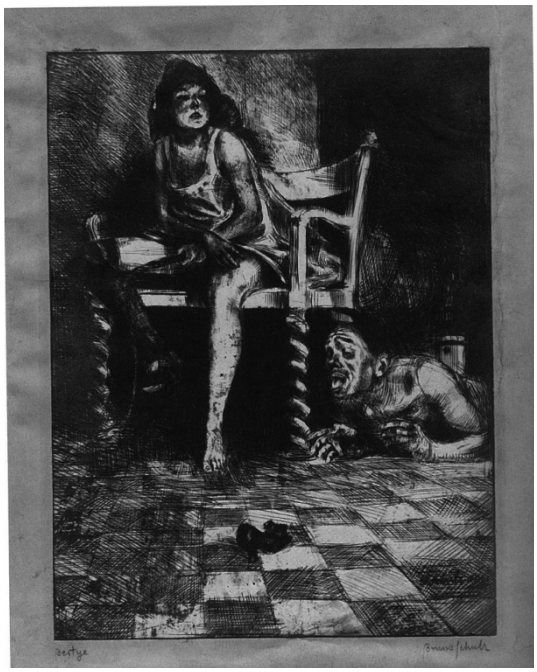
この短編では、巻き戻された時空にあるサナトリウムに息子ユーゼフが父を訪ねる。現実の世界では死んだはずの父がそこではまだ生きている。上映された部分は短編の冒頭部分にかなり忠実であり、ユーゼフが鉄道でサナトリウムに到着する場面から始まる。時間の可逆性、という短編のテーマも、吹き飛ばされた帽子がスローモーションの逆回しで戻るという場面によって表現されている。ユーゼフの人形が、クエイ兄弟に似ている点も注目したい。シュルツの短編でユーゼフはたいてい少年だが、この短編では青年だ。この人形のユーゼフが着用しているコートも実際のクエイ兄弟のものに似ている。ヨーロッパ絵画において自画像を画中に取り込むことがあるが、物語に登場する作者自身の姿はこの伝統を思わせる。一卵性双生児の 2 人の姿が、ユーゼフという 1 人の姿に託されている。

クエイ兄弟はドロホビチを訪れたこともあり、ヤジェンプスキ教授などシュルツ研究者とも交流がある。工藤幸雄氏にも会ったことがあり、そのことを工藤氏も想起している（『ブルーノ・シュルツ全集 II』、706 頁）。シュルツの兄イジドゥルの息子、すなわちシュルツの甥のヤクブ・シュルツは戦後、ロンドンに住んで自転車屋を営んでおり、同じくロンドン在住のクエイ兄弟が何度か訪ねたという。その写真を筆者は見せてもらったことがあった。

５.

休憩時間には、シュルツ研究の土台をつくった研究者であり、ポーランドのロマ研究でも知られる詩人イエジ・フィツォフスキ（映画『パプーシャの黒い瞳』の主人公にもなった）が 1979 年に工藤幸雄氏に贈ったブルーノ・シュルツのクリシェ＝ヴェールのオリジナル作品「獣たち」（Bestie）が公開された[1]。フィツォフスキとの交流は、『ブルーノ・シュルツ全集 II』の解説（708 頁）、そしてエッセイ「フィツォフスキのこと」（『文学』45（10）、1977）[2] に工藤氏が記している。「獣たち」は工藤氏が晩年勤務した多摩美術大学に寄贈され、現在は、工藤氏の教え子でもある多摩美術大学教

授の小泉俊己氏が管理している。ポーランドの美術館が所蔵するシュルツ作クリシェ＝ヴェールは、展覧会などに出すうちに光にさらされ劣化が進んでいるものが多いが、日本にある一枚はそれらに比べて状態の良さでも際立っている。多摩美術大学には同じく工藤氏の残した､映画監督アンジェイ・ワイダが描いた工藤氏の肖像画と、演出家で画家タデウシュ・カントルのドローイングも所蔵されており、今回特別に公開された。工藤氏とポーランド芸術界要人との交流が浮かび上がった。また、沼野充義氏の協力により、工藤幸雄氏の仕事として翻訳本が展示され、業績リストが配布された。



６．

イエジ・ヤジェンプスキ氏の講演「レム的思考」は、『ソラリス』を始め、日本でも愛読者の多いレムの小説、批評におけるジャンル、文体、言語の異種混淆性を必然として論じていくものだ。レムにとって科学とは、世界を記述する多様な起源の言語の集合体であり、未知なるものや新しいものを馴致するための図式づくりではなかった。科学の導き出す理論的必然は、人間社会では、感情や心理、人間判断という独立変数が加わることで統御や予測不可能なものを生んでいく。レムは文学を社会の規範や慣習を映しだすものと考え、科学論文的な要素を文学に投げ込み、「対決」させることで、人間社会においてその理論や必然がどのようにして、あるべき軌道を逸れて動いていくのかの文明実験をしていた、という読みが面白かった。異質なものや未知なるものが新しい言語をうみ、それが多様性と多義性を、すなわち文明を生み出していく、というレムの思想を、文学ジャンル論と絡めて掬い取りつつ、現在の文明・社会に対する批判的警鐘ともなる優れた講演だった。

ヤジェンプスキ氏は工藤幸雄氏、クエイ兄弟の知り合いでもあり、筆者のクラクフ留学時代の受け入れ教官でもあった。さまざまな国際学会やシンポジウムにおいて、話者が学生であろうと大御所であろうと、すべての発表に真摯に耳を傾け、常にテクストと事実に即した適切かつ鋭い質問やコメントをし、対話をする。学術的場に欠かせない信頼できる研究者である。日本でも海外研究者の招聘が日常的になってきたな

かで、20 世紀ポーランド文学の専門家として、一度は講演してほしい研究者であった。自ら公表しているパーキンソン病が進行するなか、来日し、講演していただいたことに感謝したい。

７.

その後、日本未公開のドキュメンタリー映画「スタニスワフ・レム」（1996 年、トマシュ・カミンスキ監督、43 分、ポーランド語、英語字幕付き）を上映した。若かりしヤジェンプスキ氏、エッセイ「哀れなポーランド人がゲットーを見つめる」でも知られるヤギェウォ大学のポーランド学科のヤン・ブウォンスキ教授、ノーベル賞詩人チェスワフ・ミウォシュなどが登場している。最後の数分が映らない不備もあったが、リヴィウ、ウィーン、クラクフとレムの軌跡をたどることのできる映画であった。続いて、クエイ兄弟のレム原作「仮面（マスカ）」を上映した。原作は久山宏一氏によりポーランド語から翻訳されている。

クエイ兄弟の作品上映は、工藤氏、ヤジェンプスキ氏とも交流のあったクエイ兄弟、およびルブリンのクエイ兄弟展のキュレーターであるマウゴジャータ・サディ氏のご厚意により可能になった。記して感謝したい。

８.

近年、イディッシュ語や亡命作家も含めた広義の「ポーランド」文学の日本語への翻訳が相次いでいる。当日はヤジェンプスキ教授の来日講演ということもあり、ポーランド文学翻訳者、研究者の来場も多く、最後にそれぞれの最新の仕事や研究について、コメントをいただいた。2019 年 10 月にはオルガ・トカルチュクが 2018 年度分のノーベル文学賞を受賞し、今後も松籟社の東欧の文学シリーズからのポーランド文学の翻訳、国書刊行会のレム・コレクションの第２シリーズが予定されている。ポーランドの書籍協会（Instytut Książki）もポーランド文学翻訳者向けのポーランド滞在型フェローシップを毎年公募している。しかし、「ポーランド」文学の未紹介の良作は古典、現代問わずまだ多数あり、翻訳や紹介が追いつかない状況が続く。翻訳報酬をめぐる状況、そもそもの大学の人文系学科の在り方など、さまざまな問題を改善しなくては、日本において、「帝国」の言語以外の文学研究の担い手がいなくなるのではないか、という危機感も覚える。

「なんといっても、互いを隔てるテーブルの下で、私たちはみなこっそり手をつなぎ合ってはいないだろうか？」（ブルーノ・シュルツ短編「書物」）

シュルツ、レム、工藤幸雄――ある文学をきっかけに人が交差し、つながり、国や言語や時間を越えて連鎖し、広がっていく。このシンポジウムもその一端となり、次の展開につながっていくことを期待したい。

加藤有子

注

1 「本全集第一巻の口絵に用いたガラス陰画によるシュルツの傑作「けだものたち」は、彼〔フィツォフスキ〕からの戴きもの、ユーラシア大陸にただ一点あるのみ――と自慢の家宝である。古い綴りの題名 Bestye と作者名が生々しく肉筆の鉛筆で書かれている。戴いたのは、ポーランドの知識人が反体制の運動を着実に推し進め、フィツォフスキも組織の一員として活動を始めた 1979 年の夏であった。当時、彼は著作・執筆の道を封じられ、困窮の底にあったが、「思いがけず入手できた、もう一枚あるから」と気持ちよくプレゼントしてくれた。」（工藤幸雄「訳者あとがき」『ブルーノ・シュルツ全集 II』新潮社、2 刷、1999、708 頁）。図版出典：加藤有子編『ブルーノ・シュルツの世界』（成文社、2013）。

2 「フィツォフスキのこと」にはフィツォフスキがユダヤ系であったとあるが、事実と異なる。この点は、工藤氏自身がのちに訂正している。